ISSN 1345-3580

Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.13 No.11 November 2012

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

11

CONTENTS

- 巻頭言
  反日騒乱根絶へ…
  ／深谷忠一 1
- 天理教海外伝道の資料（33）
  満州伝道関連史料⑰
  ／深川治道 2
- 天理教伝道史の諸相（11）
  関東の天理教―その１―
  ／早田一郎 3
- 「おふでさき」の有機的展開（７）
  「おふでさき」第一号：第十二首～第十四首
  ／深谷耕治 4
- 「いのち」をつなぐ―生死の現象（11）
  死をどのように考えてきたのか②
  ／堀内みどり 5
- ノーマライゼーションへの道程（９）
  海外福祉事情：デンマーク④
  ／八木三郎 6
- 天理参考館所蔵の漢族資料（３）
  北京の看板②
  ／中尾徳仁 7
- 平成 24 年度公開教学講座「信仰を生きる」：『逸話篇』に学ぶ（１）
  第５講：11「神が引き寄せた」
  ／八木三郎 8
- 図書紹介（71）
  『宗教と社会のフロンティア』
  ／金子　昭 9
- English Summary 10
- おやさと研究所ニュース 11
  第 252 回研究報告会／第 11 回教団付置研究所懇話会・年次大会／日本南アジア学会第 25 回全国大会に出席／第３回宗教と環境シンポジウムのお知らせ

巻頭言

反日騒乱根絶へ…

おやさと研究所長　深谷忠一　*Chuichi Fukaya*

昭和 14 年、筆者の父は中国の揚子江岸の大通市に進駐していた日本軍の宣撫係将校に任ぜられました。赴任後、その町一番の大地主が眼病で「何も見えない」と嘆いているのに出会い、おさづけの取りつぎで懸命にその平癒を願って 21 日目、彼の目が見えるようになりました。その結果、この地主一族が大の親日家になり、部隊を東洋鬼と罵っていた町の空気が変わり、以後その町では日本人がゲリラに襲われることは皆無になりました。

そして、この町が模範的な宣撫地域になったことが近衛文麿公爵（後の総理大臣）の耳に届き、一時除隊して帰国した父が呼び出されました。「私は公式の情報を色々聞いているが、現地にいる将校個人として、この戦争の見通しはどうか」との公爵の問に、父が、「この戦争は、武力をもってしても、経済封鎖をしても、蒋介石は倒すことはできないから負けです」と答えた。「では、どうすればよいか？」と問われたので、「一度兵隊を全員日本に引き揚げて、教育をやり直して出直すべしです。今までのように、中国人を『チャンコロ』と呼んで蔑視するような教育を改め、『世界一列兄弟』ということをよく教えこんだ上で、平和の中に大陸へ進出すれば、大東亜共栄圏建設というスローガンも実現するかも知れません。今の状態ではスローガン倒れで、中国人の心は日本人から離れるばかりです」と答えた。それを聞いた近衛公は、「もっともな御意見だが、今となっては、もうどうしようもない」と言われた、とのことでありました。

時は下って平成 14 年、筆者の義弟が中国の蘇州に渡り、電子部品の製造工場を立ち上げました。そして、その３年後の平成 17 年、歴史教科書問題等がきっかけで大規模な反日デモが勃発しました。その時、多くの日系企業が、“侵略者日本鬼子”“日本人は出ていけ”などというデモのプラカードや横断幕に恐れをなして、工場を閉鎖したり、日本に引き揚げたりしましたが、義弟は逃げずに現地に留まり、生産ラインを止めませんでした。

筆者が、「君は引き揚げなくて大丈夫か？」と聞いた時、彼からは「中国人との付き合いには難しいこともあるけれど、わが社には僕が真から心を許せるスタッフが数人います。ここまでの信頼関係を築くのは大変でしたが、今は彼らがいてくれるので大丈夫です」との答えが返ってきました。

中小企業ゆえに日本からのバックアップもほとんどない中、蘇州に行くまでは一言の中国語も話せなかった義弟が、昨年病気で倒れて出直すまで 10 年間、彼の地での活動を続けたのです。

今年がそうであったように、中国では国内で何か問題が起きるたびに、日本を標的にしたデモが起きます。その実際は常に官製デモで、政府が民衆の不満のガス抜きをしているだけ。世界のことを知らない単純で過激な国家観を持った一部の人たちが、その仕掛けに乗せられて暴発しているだけだと言われます。しかし、そうは言っても、もし中国人の大半が強固に親日的であるならば、政府の役人も反日デモを仕掛けることはできないし、その煽動に乗せられる群衆も出てこないはずです。

中国全土で吹き荒れた反日デモの暴力行為や日本を罵る政治家などの姿を見ると、「お互いの心の絆を結んで…」などというのは、絵空事のようにも思えます。しかし、だからと言って、外交力、武力、経済力などの力で問題が全て解決できるかというと、決してそうではないのです。何らかの“力”で問題を解決すれば、負けた方には必ず不満の種が残り、それがいつかまた爆発することになるのです。

先述の父の話は、宣撫工作自体が武力進出を前提にしていて、手放しで賞賛されることではないでしょう。また、義弟の話は、利害関係がある経済進出に関してのことで、彼が現場を離れた後では様子が変わっているかもしれません。しかし、少なくとも、どの時代・環境においても、人と人との心の絆が結ばれる可能性が皆無ではないことを、二つの事例は示唆していると思うのです。

人は皆親神の子供、誰もが性善なることを信じて、お互いの誠の心を引き出し繋ぐ努力をする。それが、迂遠なようでも、今世界に見せられている事情を解決する唯一確かな道だと思う次第です。